
Best Friend

梓衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B e s t F r i e n d

【Nコード】

N 2 9 9 2 K

【作者名】

梓衣

【あらすじ】

西野カナさんの「Best Friend」をもとにした、友情ストーリーです。

（前書き）

クリックありがとうございます

この作品は、西野カナさんの「Best Friend」という曲に、物語をつけたおはなしです。

梓衣の2つ目の作品となります

どうぞ最後まで読んでください！！

「おはよう」

晴れ渡り、透き通った青色の空と、ピンクの満開に咲いた桜がベストマッチした今日の朝。

卒業するまであと1日となった今日、昨日とおんなじ朝を過ごせるのも、この日まで。

「おはよう」

水木志織。 中学3年生。

「なんで明日卒業式なのに今日授業あるんだろうね」

高森恵梨香。 あたしのしんゆう。

「ほんとだよね。ムードわかんない校長って最悪」

「だよね」

・キンコンカーンコン

「起立、礼、着席」

今日も昨日と変わらず、落ち着きがない3年E組。

まだみんな、「別れ」とか気にしてないんだろっな。

前の席の朱莉^{あかり}に話しかける恵梨香。

後ろの席の美里に話しかけられる美羽。

そんなの気にしないで黒板に数字を書く、数学の山下先生。

その字を真剣に映す、学年トップの小野田さん。

みんな、いつもどおりすぎる。

たぶんそうゆうの、気にしたくないんだろっな。

ここで悲しくなっただけ泣いちゃったら恥かくのは自分だもんね。

クラスの空気だって重くなったらいやだしね。

あたしも普段通りに窓の外を見つめてボーっとする。

鮮やかなぴんくの満開の桜はとっても綺麗。

あたしには、卒業を気にしないでなんて居られなかった。

しんゆうの恵梨香との別れを考えると、気持ちがむずむずする。

あたしと恵梨香はただの仲のいい親友じゃない。

ふたりにはある共通点がある。

あたしも恵梨香も、彼氏がいる。

あたしの彼氏も恵梨香の彼氏も、みんなの彼氏よりはあたしと恵梨香のこと考えてくれてる。

だって、おなかには赤ちゃんがいる。

あたしは妊娠3カ月。

恵梨香は4カ月。

まだ他の人は知らない。

ママもパパも、先生も友達も。

あたしと恵梨香だけが知ってる、本当の辛さとか、真実とか。お互いを知り合ってるから、恵梨香はわたしのこと、わかってくれる。

誰よりも、わかってくれる。

「起立、礼、ありがとうございます」

ちよつと考え事してる間に、長かった授業は終わっていた。

「志織、トイレ行こーっ」

「うん」

授業がおわってすぐ、恵梨香が走ってきた。

「起きてから一回もトイレ行ってなくてえ、授業中ずっといきたかったんだけどっ」

「我慢しなくてよかったのに」

「えーっ。授業中トイレ行くのって恥ずくないっ?」

「まあね」

「じゃあここで待ってて」

「うん」

あたしはトイレの水道のところで待たされて、恵梨香はダッシュで個室に入って行った。

恵梨香は彼氏と上手くいってるみたいで、最近はずっと笑顔でいる。

実はあたしはここんところごちゃごちゃしてて、もしかしたら別れることになるかもしれない。

赤ちゃんもいるから困ってて。

誰かに相談したいけど、恵梨香は幸せそうだから、なかなか言わずらくて。

鏡に映ったあたしは笑っていなかった。

無理をして笑おうとおもっても、不安が募った笑顔になる。

「上手くいかないね」

急にうしろから声がした。

鏡には心配した顔の恵梨香が映っていた。

「びつくりしたあ」

笑えてなかったことが恵梨香にバレたら、恵梨香は絶対心配するし。

バレないように、精一杯の笑顔をつくる。

「最近志織ふつつじゃないよ？」

恵梨香はあたしが悩んでいること、わかってたみたい。でも、心配はかけられない。

「ええ？全然ふつつだよ。恵梨香がおかしいんじゃないの？」

「そんなようには思えないけど？」

さすがに恵梨香はだませない。

「心配しすぎだよ。平気だった言ってるのに」

「だめだよ志織っ。ちゃんと言って」

そういえば、恵梨香はあたしのこと、ちゃんと怒ってくれるんだっ
た。

でもあたしは、恵梨香の幸せ奪^はえるほどの存在じゃない。

「平気だよ」

ひとこと言っ
て、急いで教室に戻った。

数秒で手を洗っ
て、走って恵梨香が追いかけてくるのがわかった。
それでもあたしは黙っていた。

あたしが席に着いたとき、ちょうどよく授業が始まるチャイム
が鳴った。

それを聞いた恵梨香は黙って自分の席に着いた。

はじめて恵梨香と席が遠かったことを幸いに思った。

帰りのHRが
はじまった。

担任の久住先生は、明日の卒業式に熱が入っているっぽい。

それに比べて生徒たちは、先生の話を見無視してそれぞれの時間を
過ごしている。

あたしもボーっと先生の話を見聞きながら、明日の卒業で違っ
た高校

に通うことになる

恵梨香との別れのことをまた、考えていた。

「起立、礼、さようなら」

最後の中学校での授業がおわった。

「志織ー？帰ろっ」

「うん」

いつもどおり、恵梨香と一緒に帰った帰り道。

「あしたで卒業だね。やっと義務教育おわるしっ」

恵梨香は卒業が嬉しいと思ってるみたい。

あたしは、そんなプラスには考えられない。

恵梨香みたいに、卒業が辛いものじゃなくなればいいのに。

「なんかさあ、長かったよね」

うん。

長かったね。

あたしと恵梨香が初めて話したのも、中1の時だし。
家族よりまともに話してると思うよ。

「志織、2次で西高受かったんでしょ？」

「……うん」

「おめでとうっ！志織が高校行けなかったらどうしようかと思っ
てた。ほんとおめでとう」

「ありがとう」

あたしは1次で1回落ちて、2次でおなじ高校受けたら受かった
の。

あたしはもちろん嬉しかったし、家族も喜んでくれた。
でもそれ以上に恵梨香は喜んでくれて、本当に嬉しかった。

「じゃあ、また明日ね」

「うん」

あたしの家が目の前に見えて、あたしと恵梨香は一旦別れた。

「ただいまあ」

「おかえり。遅かったわね」

「うん。ちょっと友達と話してて」

家に着いたのは7時半だった。

着替えてご飯食べて、お風呂入って、歯磨きして。
ベットに入ったのは12時を過ぎていた。
そろそろ寝ないと。

って、思った時。

・ピリリリリ　ピリリリリ

携帯が鳴った。

電話は彼氏、隆宏だった。

・ピッ

「もしもし」

「あつ志織。出ないかと思った」

驚いた声で言ってきた。

今日はたまたま起きてたんだから。

「どうしたの？」

「あのさ……」

たぶん、別れようとか言われる。
怖かった。

「俺ら上手くうつてねえし、わかれたほうがいいと思った」

ほら。

「……うん。でもさ、赤ちゃんは、どうすねばいいの？」

「降ろせよ」

「……え」

「だってどう考えてもひとりでは育てらんねえだろ」

「そうだけどっ」

「だからといってヨリ戻すのも無理だし」

「……っ」

「別に降ろすのくらいどうってことなくねーか？」

「そんなことないっ！あたしの初めての赤ちゃんだし、ちゃんとしたいっこの命なんだよ？」

どうってことないんだったらとっくに降ろしてるよ。

親にも言わなきゃいけないし、陣痛だっけ痛いんでしょ？

降ろすのなんて簡単だけど、これも命なんだからっ

「……じゃあお前がどうにかしろ」

「そんなこと言われてもっ」

「俺には重すぎるんだよ」

- ツー ツー ツー ツー

切られた。

そんなの勝手すぎるよ。

男は種ばらまけば勝手に子供が生まれるけど、

女はその種育てて辛い思いして産まなきゃいけないんだからさあ。

……どうしよう。

……恵梨香……

恵梨香の声聞けたら、がんばれる。

- プルルルルルル

「もしもし」

「恵梨香………?」

「どうしたの?」

「こんな遅い時間に……ごめんね」

「ううん。話聞くよ?。」

「……別れたの」

「え?」

「隆宏と別れなきゃいけなくなっちゃったの」

「なにそれっ」

「俺には、重いんだって」

「最悪。なにそれ。ちゃんと聞く。おしえて?。」

こんな遅い時間にも関わらず、恵梨香は最後まで話を聞いてくれて、相談にも乗ってくれた。

恵梨香がいてくれてよかったと思った。
本当に本当に。

あたしは肩が軽くなって、その日はちゃんと眠れた。

「おはよう志織」

「おはよう」

今日の朝は、とっても清々しかった。
ひらひら舞う桜が綺麗だった。

卒業式。

ひとりひとりが3年間の思い出を少しずつ思い出して、みんなが泣いてる。

久住先生も、あたたちと一緒に泣いてくれて、みんなで記念に写真を撮った。

みんなとの思い出に感謝した。

帰り道、あたしは恵梨香とふたりで帰った。
いつもの道に別れを告げながら、一步一步。

「恵梨香？」

「ん？」

「いままでありがとう。恵梨香がいてくれて、ほんとよかった」

「……あたしも」

「よく考えたら、恵梨香と居れたとき、いっつも笑ってた気がする」

「ええ？ほんと？」

「うん」

「じゃあさ、約束しよう」

「え？」

「あたしたち、高校行って離れ離れになっても、ずっと心友だよ」

「……うんっ」

あたしは今日、いままでで一番泣いた。
恵梨香の言葉が嬉しかった。
恵梨香がすきだから。
だいすきだから。

世界で一番、幸せになってほしいって。

今日はじめて思った。

(後書き)

どうでしたか!???

よければ感想お聞きしたいです。

ここまでよんでくださって、

本当にありがとうございます!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2992k/>

Best Friend

2011年10月6日03時28分発行